ブックレット

安土城と城下町

VR安土城より

安土城跡遠景

「信長は、中央の山の頂に宮殿と城を築いたが、その構造と堅固さ、財宝と華麗さにおいて、それらはヨーロッパのもっとも壮大な城に比肩しうるものである」「そして（城の）真中には、彼らが天守と呼ぶ一種の塔があり、我等ヨーロッパの塔よりもはるかに気品があり壮大な別種の建築である。この塔は七層から成り、内部、外部ともに驚くほど見事な建築技術によって造営された。」

（中公文庫『フロイス日本史３』より抜粋）

はじめに

尾張出身の戦国大名**織田信長**が、天下統一を目指しながら近江の**安土山**に築城したのは、天正４年（１５７６）のことです。３年後の天正７年（１５７９）には、初期の高層建築として有名な天主が完成し、そこへ移り住んだと記録されます。天正１０年（１５８２）６月２日本能寺の変により織田信長が滅ぼされた後、安土城へは明智光秀が入城しましたが、まもなく退城した６月１４日、何らかの理由で天主をはじめとする主郭部分が焼け落ちました。その後は織田信長の孫である三法師（織田秀信）や二男織田信雄が入城しましたが、天正１３年（１５８５）、羽柴秀次の八幡山城築城と共に廃城となったようで、城下町も八幡へ移転しました。

「天正四年正月中旬より江州安土山御普請惟住五郎左衛門に仰せつけられる云々」四月朔日より、当山の大石を以て、御構の方に石垣を築かされ云々。観音寺山・長命寺山・長光寺山・伊場山所々の大石を引き下し、千二千三千宛てにて安土山へ云々」(『信長公記』角川日本古典文庫から)

1．織田信長期の安土城と城下町

(1)．安土城の構造　ーこれまでにない新しい特徴ー

安土城は近世城郭の先駆的な城と言われています。それは以下の理由です。

① 石垣　ー城全体を覆うような高い石垣の出現ー

安土城跡の**石垣**は、全面を覆うように築かれており、これはこれまでの城にはなかったことです。当初この石積の技術には、**穴太衆**が関与していると言われていましたが、広範囲の工人が関与しているのでは等、穴太衆単独技術に関して異論が多く出ました。確かに安土城の石垣を現地で確認すると、種類多岐にわたる各石垣の技術があることが一目瞭然であり、諸地域の石工・石積工人集団が、築城に携わったことを示しています。

しかし安土城の石垣の基本は、やはり観音寺城の技術です。それは石材と高い石垣の技術から指摘できます。安土城に隣接する六角氏本城**観音寺城**の多くの石垣。**石材**は、全てこの周辺でしか産出されない**湖東流紋岩**で、石材産出する楔跡「**矢穴**」が安土城と同じく現時点で一部を除き見られません。石の目を判断して割るという卓越した技術を持つ工人がおり、それを確保ができた証拠です。**石垣の高さ**は、７mから１５mの高石垣の安土城に対して、既に観音寺城は１０m を越える石垣を持っていました。ただ相違点は**石垣の積む角度**です。隣の観音寺城では８０～９０度の急角度ですが、安土城は６０～７０度。石垣上に建物が建てられる角度を持っていました。

②礎石建物　ー山上の城郭内に常の居住空間ー

１６世紀後半には、これまでにはなかった山城等への恒久的な建物建設があちらこちらの発掘調査で確認されるようになりました。山城の居住空間が必要となった表れと思われます。例えば、六角氏の観音寺城や、浅井氏の小谷城など本格的な御殿ともいえる建物が、常にいる山麓と、山上にあることが分かってきています。安土城では、城主の常の居住空間が山上にあって、それも本格的な御殿である点と山内の御殿以外でも礎石を使用した本格的な建物が多く存在したことにこれまでになかった凄さがあります。

③瓦葺建物と瓦生産　ー

室町時代の頃、建物に瓦を使用するのは概ね寺院建築のみで、城郭に瓦屋根を採用している事例はありませんでした。隣接する観音寺城も石垣や、礎石建物遺構は見つかっていますが、瓦葺建物の形跡はありません。但し、決して工人の確保ができなかった訳ではなく、浄厳院の前身、慈恩寺楼門は安土城に先行した瓦葺であり、六角氏の瓦工人の確保が可能であったことを示すものです。

その中で安土城の建物には多く瓦が使用されました。これは織田信長によって使用の発案がなされ、工人を確保したものと思われます。信長公記では、瓦焼唐人一観などの名前が記載さ

写真　左：現在の安土城跡大手道　　右：ＶＲ安土城大手道復元一場面（近江八幡市）

安土城築城のための工人が絡んでいる様が書かれています。発掘調査の結果、使用された瓦は他には見られないかなり良質の瓦で、以前の寺院などに使用されていなかった独自の技術であるようです。また金箔瓦という新たな技術が発案されたことが特筆すべき事象です。

ところで安土城の瓦がどこで生産されたかの解明が課題ですが、城内と同様の瓦を焼く瓦窯が見つかっていないため、よく分かりません。

」

④天主と本丸御殿そして櫓門　　ー高層建築と巨大建物建立の技術確保ー

現在の調査研究の中で、これまでになかったと思われる近世城郭への足掛かりといえるものを紹介するならば、天主、巨大な御殿、櫓門といえます。

まず天主は、跡地に１ｍを越え、１間が７．２尺の幅を持つ礎石が多数あり、かなりの大きな建物であったことが分かります。信長公記やイエズス会日本年報や公家の日誌では何らかの形態で外観が五重に見える建物であったと思われ、屋根には金箔瓦が葺かれたことも出土遺物から明らかです。市（安土町）では、記録にある狩野永徳筆の「安土図屏風」で天主を知るべく研究者に調査を委託しましたが発見できていません。多数の復元案の中、内藤昌先生の全面的ご協力により、安土城郭資料館、安土城天主信長の館、安土城跡ガイダンスに模型を展示し、ＶＲ安土城での復元で実感できます。

次に大規模な御殿です。これまでの発掘調査資料の評価で、清涼殿に近い本丸御殿であったとされますが、これもまだまだよく分かりません。しかし本丸跡に残される巨大な礎石と７．２尺の巨大建物を推定させる柱幅、礎石の数は清涼殿かどうかはともかくとして、かなりの御殿であったことは揺るぎありません。日本最初のことです。

また伝羽柴秀吉邸跡では、櫓門と同じ礎石配置を持つものが発掘調査で確認できました。これも現状で安土城が最古と思われます。

⑤防御機能　　ー枡形虎口の発達ー

城の入口である虎口の防御機能を強固にするため、枡形虎口の形態を採る黒金門跡。内にある枡形より外へ広げた枡形が安土城の防御の特徴で、発達した防御の形といえます。

以上５つの諸要素は、現在の研究でも中世城郭に見られない近世城郭の要素であって、それらを結集させたと言えます。ただ、これら新しい技術も出発点であることは間違いなく、この後

【写真】上：安土城跡天主礎石　　右：安土城跡天主入口

「安土山御天主の次第」「御大工岡部又右衛門、漆師首刑部、白金屋の御大工宮西遊左衛門、瓦、唐人一観に仰付けられ、奈良衆焼き申すなり。御普請奉行木村二郎左衛門」(『信長公記』角川日本古典文庫から)

豊臣秀吉の大坂城などを経て、急激に発達していった大規模な近世城郭から見れば、まだまだです。また、安土城自体の不明点も多く、解明の一つ一つは今後の調査研究の成果を待たねばなりません。

(2). 安土城跡の屋敷地　　ー貞享年間の安土城の図から読めることー

八幡山築城と共に安土城が廃城後約１００年の貞享４年（１６８８）の安土山を描いた図があり、そこには信長の家臣名が書かれた屋敷跡が書かれます。

主郭部分「天守」「本丸取付臺」「本丸」「二丸」「廣間」「名越屋敷」「長谷川屋敷」「堀久太郎」「菅屋九右衛門」**その他**「羽柴秀吉」「家康公」「武藤助左衛門」「江藤加賀衛門」「中條将監」「御茶屋」「武井肥後入道夕庵」「穐田城之助信忠」「摠見寺」「森乱丸」「織田兵衛信澄」「福富平左衛門」「市橋下総守」とあり「羽柴秀吉」「家康公」以外は一門か近習であると思われます。なおその中で「江藤加賀衛門」はよく分からず、近江與地志略では丹羽長秀の家臣「青山加賀」としています。現在研究の中で諸説ありますが、これは今後の調査等で解明が望まれます。

【写真】上左：　安土城跡主郭部分二の丸下付近　　上右：安土城跡黒金門枡形
下左：　摠見寺二王門（重文）　　下右：　摠見寺三重塔（重文）

「元日より菅屋九右衛門、堀久太郎、長谷川竹両三人御奉行にて御普請これあり」（『信長公記』角川日本古典文庫から）

写真　安土古城図（東康彦蔵）（滋賀県立安土城考古博物館写真提供）

「尾・濃・勢・三・越・若州・畿内の諸侍、京都・奈良・堺の大工、諸職人を召し寄せられ云々」（信長公記）

（3）．安土城下町の造営　　（安土城下要図参照）

地籍図と地名調査・史料から安土城下町の構造を推定すると、現時点で範囲は市内安土町下豊浦、上豊浦、常楽寺、小中、慈恩寺であったと思われ、その中には**「安土城下要図」**のとおり城下町を思わす地割や堀、地名が残されています。地名の中には、川尻、高山、金森、佐久間等家臣屋敷を思わす地名や博労、鉄砲等町に関わるもの、ダイウス、シュノミザ、貞安等キリスト教や仏教に関わる地名があります。

また道路線を見ると戦国城下町の発展の特徴のある長方形街区、短冊形地割が確認でき、その基本方位は①活津彦根神社から南に延びる地割方位、②沙沙貴神社横の蒲生郡条里の地割、③新宮神社横の地割方位、④安土城南面下街道の地割方位があり、城下町の造営の様子がよく分かります。

また発掘調査からは以下のことが分かっています。

まず室町時代の安土の方位は、②の地割が基本であったのを安土城下町ができる直前から①の地割が使われるようになりました。

次に安土城下町を建設したときは、①方位の道路を三条南北に敷設し、城下町としての原型を造りました。

更に天正８年、④方位の主軸道路を敷設し、城下町の拡張を図っていきます。その後は下豊浦地区の東部の湿地帯へ④方位の造成を延長する状況で確認できることから、この地域の湿地帯に城下の拡張を計画したと思われます。西へは、②方位の道路を、北には①方位の道路を延長させ、街区を拡張を狙ったと思われます。南へは常楽寺地区の寺内と呼称される箇所にはおそらく本願寺寺院を置いて、東に②方位の地割を拡大させ、さらに浄厳院門前も、南へ大規模な造成を開始し始めた可能性があります。

港湾施設としても、下豊浦、常楽寺では多数の港湾に関する遺構が確認されています。下の写真のように運河状の遺構が見つかり、水運が盛んであったことがわかります。

寺院の配置も特徴的です。まず六角氏の氏寺、律宗慈恩寺は浄土宗の浄厳院に改め、東の桑實寺と共に防御面を担います。もともと真宗の勢力が強い地域であった常楽寺には本願寺別院が推定でき、豊浦荘地域は浄土宗の正福寺推定等主にこの２つと組織が民衆寺院で、おそらく都市化に伴い、特に遺体処理等にも関わった可能性が考えられます。

【写真】　左：安土城下町の調査状況（港跡）　右：安土城下町　石組井戸

「顕如尊師蒲生郡安土ト云所ニ御建立。信長ノ寄進ニテ二町ニ三町ノ御境内ナリ云々」
（「本福寺舊記」『蒲生郡志』巻七　滋賀縣蒲生郡役所大正７年）

（４）移転した有力寺院

①本願寺八幡別院

天正８年（１５８０）に織田信長と本願寺顕如との講和の後、安土城下町に「本願寺御坊」の建立とともに、六町規模の町が造られたとされ、現在の安土町常楽寺の字寺内がその跡地と伝えられてまいす。

その後八幡山築城と共に安土を去り、文禄元年（１５９２）八幡山城下へ移転し、現在本願寺八幡別院（浄土真宗本願寺派）として法灯が護られています。現在、江戸時代に整備された伽藍は、県内でも屈指の大きな本堂を中心に、表門、裏門、鐘楼（すべて県指定）と対面所があり、本願寺勢力の大きさが今に至ってもよくわかります。

②西光寺

浄厳院で行われた「安土問答」に関わった浄土宗僧貞安が天正８年（１５８０）に安土城下に建立した当寺は、天正１４年（１５８６）に八幡山城下近くの中村へ移転しました。江戸時代を通じて多数の末寺を有する浄土宗の有力寺院としてこの地にあると共に、八幡山城下を守るような位置に所在し、現在でも塀と堀に囲まれた広い境内・大きな本堂を持ち、また境内には、織田信長の五輪塔もあります。なお安土城下での当寺では「貞安」地という地名にあったと推定されています。

③正福寺

「安土問答」で活躍した浄土宗僧玉念が安土城下に建立後、天正１３年（１５８６）に八幡城下へ移転した寺院です。江戸時代を通じて八幡町の有力者が多数檀家に名を連ねています。

現在の正福寺は、江戸時代前期の本堂と山門があり共に県指定文化財となっています。

写真　上：本願寺八幡別院本堂（県指定文化財）　中：西光寺山門　下：正福寺本堂（県指定文化財）

「安土御山にて相撲とらせて御覧候云々」「東馬二郎云々」（信長公記より）
「安土山御天主の次第」「御普請奉行、木村二郎左衛門」（信長公記より）

（5）城下へ入った有力者

豊浦荘の東村の東家は、宇多源氏源行実の後裔とされる有力者で、江戸時代には庄屋を務めた家です。信長公記に書かれる相撲の「**東馬二郎**」は、当家と関連する可能性があります。屋敷地は城下に組み込まれ、現在でも江戸時代の主屋などが保存されています。江戸時代の図面には土塁と堀も記載され、中世以来この地を治めた豪族であったことが分かります。

この屋敷の南北にはそれぞれ「ダイウス」、「シュノミザ」の呼称地があり、前者は**セミナリヨ跡**と推定されます。信長公記には天正８年（１５８０）に伴天連の屋敷を与えた記録が残る日本最古のヨーロッパ文化であると言えます。また、周囲は「聖霊焼」「敷来」など、一見キリスト教を想像するやや珍しい地名が残ります。

一方佐々木荘の常楽寺には、室町時代沙沙貴神社の「惣官」「大神主」役と記録に見える木村氏が力を持っていたようです。織田信長がこの地を支配してからも、**父木村二郎左衛門尉**や子源吾等が、信長配下となり活躍し、安土城天主の普請奉行や各地の奉行的役割として記録されます。「楽市楽座」で名高い「安土山下町中掟」にも町の奉行的な役割で名前を連ねています。伝木村氏館跡の近くには相撲の東馬二郎に対抗する「**西馬次郎屋敷**」の伝承地があります。

なお豊浦の東氏、常楽寺の木村氏の２つ豪族は、城下町内でありながら土塁や堀で武装した屋敷を伴う豪族であったようですが、本能寺の変で織田信長が滅んだあと何故か明暗を分けたようで、木村氏は以後常楽寺の記録から姿を消し、一方東氏は下豊浦東村の庄屋として江戸時代を生き抜くことになります。

写真　上：東家母屋・石垣（国登録文化財　東氏屋敷）　中：推定安土セミナリヨ跡（ダイウス呼称地）
下：常浜から伝西馬次郎屋敷伝承地と更に伝木村氏館跡を望む

「安土御構北、松原町の西、海端へ付いて御馬場を築かされ云々」（『信長公記』角川日本古典文庫から）

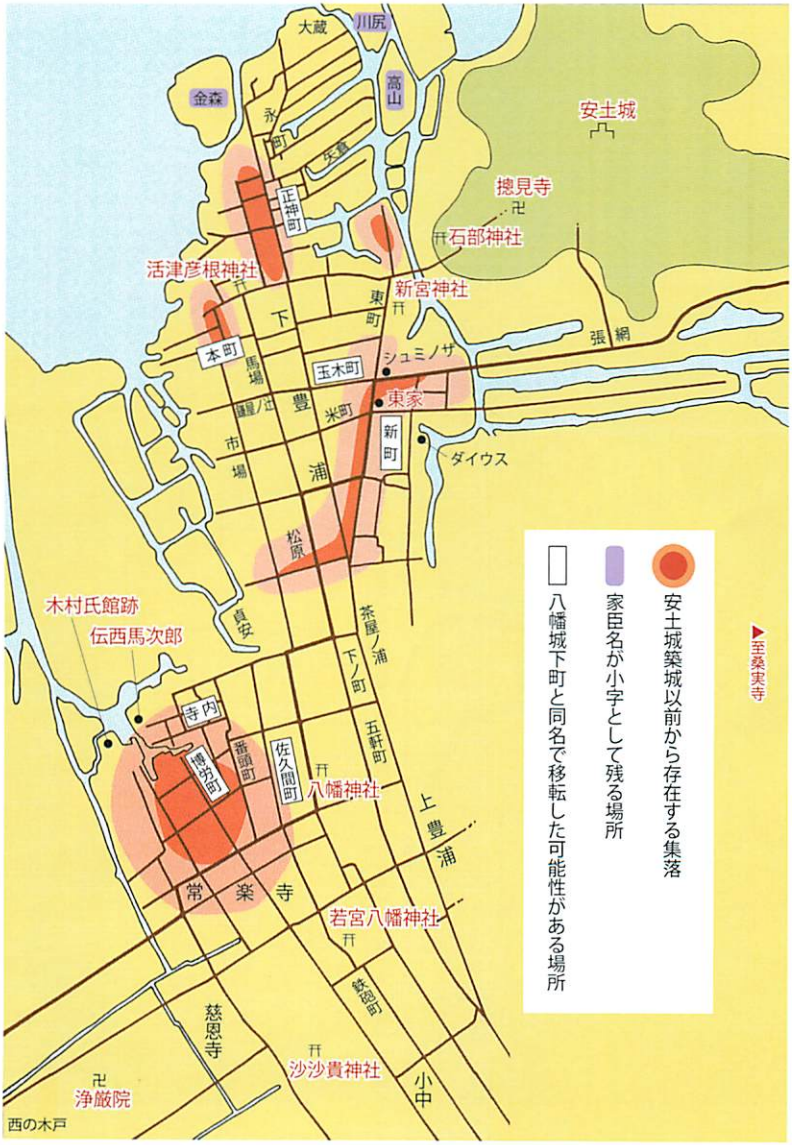

図　安土城下町要図　（「近江八幡の歴史　第６巻　通史１図６７」を転載　加筆）

「豊浦荘　是佐々木荘の北也。高木村・豊浦村・須田村・安土村・石寺村等をいふ。」
（『近江輿地志略』歴史図書社から）

写真　江州蒲生郡豊浦村与須田村山論立会絵図　（東康彦蔵）（滋賀県立安土城考古博物館写真提供）

「（永禄十一年九月） 廿二日桑実寺御成云々」（『信長公記』角川日本古典文庫から）

２．安土城築城以前

安土城と城下町が織田信長の手により築城、整備された地は、もともと主に六角氏が力を持っていた佐々木荘と、大和薬師寺が大きな力を持っていた豊浦荘があり、その荘内にそれぞれ中世の村がありました。

（１）豊浦荘

安土城下町は、本能寺の変以後衰退し、安土城下町模式図のように赤の部分豊浦荘内５つの村として江戸時代を迎えたようです。神社の社伝は、創建が奈良時代から平安時代まで遡り、また本殿などの部材は室町時代まで遡ることが分かっています。おそらく安土城以前の中世には既にこのような村があって、安土山築城後各村の空間を埋めるように安土城下町が完成し、八幡山城築城で八幡城下に大部分が移転後、町の機能が無くなり、また中世の村に戻ったものと思われます。下の写真のうち上段は、現在の桑實寺から下豊浦、上豊浦など豊浦荘一帯を撮影したものです。更に遠景には常楽寺などの佐々木荘も確認できます。下段は桑実寺縁起に見る室町時代の豊浦荘、佐々木荘です。今とあまり変わっていないことが見て取れます。

【写真】繖山から見た現在の上・下豊浦地区（安土山と城下町があった場所）

桑実寺縁起　繖山から見た現在の上・下豊浦地区（安土山と城下町があった場所）

写真　上：安土遠景（柴垣源二氏提供）下：絹本著色桑実寺縁起（重文）

①桑實寺

豊浦荘は奈良時代以来、大和薬師寺とかかわりが深い荘園でその管理者として**桑實寺**があり、江戸時代まで、豊浦の各神社や薬師講など関わりが深い記述が、現在でも数多くあります。おそらく支配的な立場として重要な位置を占めていました。
現在でも支院や坊を経て、最上に檜皮葺桁行５間梁間６間で室町時代前期の本堂（重文）があり、素晴らしい細工は外観、内部共に一見の価値を有します。

②新宮神社

豊浦荘東村の鎮守社です。平安時代後期に勧請されたと伝わり、『豊浦庄検注文書』（正和２年　１３１３）に「新宮」と記されます。

社蔵の絹本著色薬師十二神将像（県指定）は南北朝時代の作で、薬師寺文書などにある聖武天皇勅施入文が上部に書かれたものです。これは薬師寺とその末寺桑実寺が東村と新宮神社の支配を示したものです。

これに対し守護六角崇永氏頼が室町時代大般若経（現在正禅寺蔵　県指定）を新宮神社へ施入しました。大般若経は中世の村では村内秩序を保つための重要な経典でありわざわざ「六角崇永から、新宮大社宛」と明記された大般若経を作り、これまで同神社が持っていた同経を手放してまで（現存）受け入れた強引なやり口でした。この村の薬師寺と六角氏のし烈な主導権争いが読み取れます。

写真　上：桑實寺本堂（重文）　　中：新宮神社大宮社本殿（市指定）　　下：新宮神社拝殿（市指定）

『聖武天皇勅施入願文』「薬師寺」「水田壱佰町」「四至　近江国蒲生郡　東限神崎蒲生堺并佐々木山長峯　南限鳥坂長峯　西限五条畔　北限大渭」「天平感宝元年閏五月廿日」「勅御朱印　奉勅　正一位左大臣兼太宰帥橘宿祢諸兄　右大臣従二位藤原朝臣豊成　大僧都法師行信」

加えて大般若経の本尊である絹本著色釈迦十六善神像（市指定）も現存します。これらは、織田信長の本拠地であって、前時代のものを持ってそのまま村を維持したと思われ、貴重な事象です。

三間社流造の大宮社本殿は江戸時代中期ですが中世部材が多く残り、拝殿は茅葺（材料ヨシ）の貴重なものです。

③活津彦根神社

『豊浦庄検注文書』（正和２年　１３１３）の「庄神」に比定される平井村、下村（現永町）２か村の鎮守社です。三間社流造で５ｍを越える本殿があり建立は寛永３年（１６２６）です。「御馬場」が地名で同神社南にあります。

④石部神社

安土村の鎮守社で、延喜式内の同社名とされ、『豊浦荘検注文書』では「高宮」と思われます。一間社流造の本殿は瓦銘から享保年間のものと思われ、天井などに室町時代の部材が利用されています。同社は平安時代中期の薬師如来像（重要文化財）があります。

⑤八幡神社

上村（現上豊浦）の鎮守社で、本殿、稲荷社がそれぞれ元禄３年（１６９０）、元禄９年（１６９６）であり、特に写真の春日社は一間社春日造で室町時代の蟇股や組物を利用した 17 世紀の建物です。

中世以来豊浦荘各村の鎮守であって、安土山築城以前の中世から各村があったことの証明になります。

またこれら神社資料からそれぞれ桑實寺の影響を受けており、４つの薬師小堂が講に守られて残ります。

写真　最上：新宮神社本殿（大宮社　市指定）上から二番目：新宮神社拝殿（市指定）　中：活津彦根神社本殿（市指定）　下から２番目：石部神社本殿　　下：八幡神社春日社

沙沙貴神社

「正月二日に、安土町人共に御鷹の雁・鶴を余多町々へ下され、添きの由候て、佐々木宮にて御祝言を仕り云々」（信長公記）

（2）佐々木荘

①沙沙貴神社

佐々木氏の氏神として崇敬された古社です。平安時代の「延喜式」以降明確な史料に記載されるのは、『信長公記』「天正九年」に「佐々木宮」との内容のみで、棟札等で室町時代六角氏とかなり結びつきの強い神社であることがわかりますが、これだけの規模の神社でありながらまだまだ不明な点が多く今後の研究が待たれます。

現在では常楽寺と慈恩寺の鎮守社であると共に、小中、中屋、上出を含めた広域の氏子圏を持つ神社です。

現在の境内は、楼門を入ると拝殿、本殿が直線に並び、本殿西には旧中門、権殿、楼門の東西には回廊を持つ形態を持っています。本殿の周囲は透塀があり、これら８棟は江戸時代中期から後期の建物として県指定文化財に指定されています。特に本殿、権殿、拝殿等は佐々木氏の氏神から丸亀藩京極家の建立によるものです。また本殿は五間社という県内でも規模の大きな社殿で、佐々木氏神の威厳を保っています。

神社に伝わっている寛永年間に書かれたものを寛政３年（１７９１）に模写した境内の鳥瞰図には、現在と同じの建物の規模と配置が見受けられます。

②若宮八幡神社

小中の鎮守社で、室町時代「新八幡宮」という神社名であったと思われます。近江守護六角氏と関連が深い神社で、新宮神社へ施入した大般若経を納めた神社が新宮神社と当社であったと記録されることで知られます。

現在は江戸時代後期に建てられた一間社流造の本殿と拝殿があります。

なお小中は、他と違った六角氏の関連が深い地域であるらしく、六角氏がこの地から後退してからも、地元正念寺では六角氏主家の位牌等が残されています。

写真　上：全景　　中：本殿と拝殿（滋賀県指定文化財）　　下：若宮八幡神社本殿拝殿

「是も相副えられ、安土町末浄土宗の寺　浄厳院仏殿にて宗論あり　寺中御警固として織田七郎兵衛信澄・菅屋九右衛門・矢部善七郎・堀久太郎・長谷川竹五人仰付けられる」（信長公記　角川日本古典文庫）

③浄厳院　　ー守護六角氏の寺であった慈恩寺を織田信長が再興した寺院ー

浄厳院は、天正５年（１５７７）織田信長によって近江・伊賀の浄土宗本山として現在地に創建されました。『信長公記』には、「安土町末浄厳院」他の記述から安土城下町の端であったことが分かります。周囲に堀状の遺構があり、城下の守る役割を担ったものと思われます。開山は応誉明感（おうよみょうかん）。栗太郡の金勝山浄厳坊及び金勝山東谷阿弥陀寺の第８世で、知恩院とも深い関係にある高僧です。

浄厳院は安土問答（安土宗論）でも有名です。『信長公記』等に１５７９年（天正７年）浄土宗霊誉玉念安土の町で説法中、法華宗信徒の建部紹智と大脇伝介が議論を吹っ掛けたことを発端に、浄土宗の僧（浄蓮寺玉念・西光寺貞安・正福寺洞庫）等と、法華僧（頂妙寺日珖・常光院日諦・久遠院日淵）等の間で行われ、寺内の警備に、津田信澄・菅屋長頼・矢部家定・堀秀政・長谷川秀一の５人があったったと記録されます。結果法華宗は敗れて処罰者を出し、以後他宗への法論を行わないことを誓わされました。現在でも浄厳院には記録が残り、また「カチドキ念仏」という念仏が今に残ります。

伽藍も特徴的で、近世に整備された伽藍の中に、室町時代後期本堂と楼門が残ります。本堂は桁行七間（約２１m）梁間六間(約１８m）という大型で、八幡山山麓にあった興隆寺の弥勒堂を移築したとされます。大きい楼門は、本堂の正面にある大型楼門は、この門が一度も移築された痕跡が認められないことから、浄厳院の前身である六角氏の慈恩寺の楼門であったと思われます。これは江戸時代伝承や風聞を集めた『近江與地志略』に記載されます。

本堂内にある仏像も特徴的です。現在の本尊木造阿弥陀如来坐像は平安時代後期の丈六仏の大きな像で、台座、光背、天蓋がセットで残る全国でも稀な貴重なものです。浄厳院が創建された時、愛知郡から移動されたと伝えられています。その隣に安置される木造釈迦如来立像は鎌倉から室町時代清涼寺式像で、『近江與地志略』には慈恩寺の本尊とします。

建物も本尊も、それぞれ織田信長の浄厳院、六角氏の慈恩寺といった新旧が並列するある意味趣き深い史跡です。

写真　上左：　浄厳院楼門　（重要文化財）　上右：　浄厳院本堂　（重要文化財）
　　下左：　浄厳院鐘楼　（市指定）　下右：　浄厳院不動堂（市指定））

「(天正十年) 正月十五日　御爆竹　江州衆に仰せ付け云々」(『信長公記』角川日本古典文庫から)

おわりに　ー今に伝わる行事ー

村の祭礼：上・下豊浦、常楽寺では主に４月祭礼が行われ、奉納する松明の火によって幻想的な火まつりの様子現在がでも見られます。松明に照らされた神域を鉦、太鼓の鳴り物で囃され、神輿が渡御される姿は、江戸時代以前からの雰囲気さながらです。中でも常楽寺村から高さ５ｍを越える勇壮なヨシの大松明が沙沙貴神社へ奉納、奉火されます。

節句：５月には、沙沙貴神社は５月節句に現在でも馬乗りと称されて祭りが挙行されます。下豊浦でも以前は５月の祭礼があったようす。

宮座：沙沙貴神社は４月、５月、１０月に宮座が挙行されます。本来は宮座構成員が神域で神様と共に食事をするという非常に大切な儀式でした。沙沙貴神社は十二座あり、数の多さが特徴的です。豊浦でも以前はあったようです。

相撲と竹相撲：地元で新宮神社で行われていたと伝えられる竹を持っての相撲で、勝者に東、西の姓を与えられたとされます。東家に関連品が伝わります。また常楽寺には伝西馬次郎館が伝わります。史料では、「安土御山にて相撲とらせて御覧候云々」「東馬二郎云々」というように元亀元年から天正９年までの間で多数回の相撲が行われたことが信長公記により確認でき、その中で「東」という人物や安土を収めた「木村氏」の名前が記載されます。

利用文献　『近江與地誌略』歴史図書者 1968
『信長公記』角川日本古典文庫 1969 奥野高広・岩沢愿彦校注
『フロイス日本史 3』中公文庫 2000 松田毅一・川崎桃太訳

協　力　摠見寺　滋賀県立安土城考古博物館　東康彦　浄厳院　沙沙貴神社　桑實寺　活津彦根神社　新宮神社　石部神社　八幡神社　若宮八幡神社　本願寺八幡別院　西光寺　正福寺

写真　上：下豊浦四月まつり（東方）下：四月まつり沙沙貴神社へ奉納の常楽寺大松明
印刷　(有)東與竹堂ひがし印刷　　編集　発行　近江八幡市　　平成 31 年３月（２版）